



卓 話



「水戸徳川家について」

(財) 水府明徳会会長

徳川 斉正氏

お招きをいただきました徳川でございます。現在、東京海上日動火災保険(株)のサラリーマン兼財団法人水府明徳会の会長を務めております。



財団法人水府明徳会は、昭和42年に祖父圀順により設立された財団で、水戸藩第2代徳川光圀公が藩主を引退してから1700年に亡くなるまでの10年間を過ごした史跡西山荘の保存、管理、公開、昭和52年には父である徳川圀齊が開館した彰考館徳川博物館の運営を業務としております。

博物館には、重要文化財である徳川家康公の遺品をはじめ、水戸徳川家歴代藩主に纏わる伝来品3万点の他、光圀公が始めた大日本史をはじめ、その編纂のために助さん、格さんが全国から集めた歴史書や資料などの書籍2万9千冊余りが収蔵されています。

水戸といふとかなり遠く感じられる方が多いのですが、上野からJRで65分の距離ですので、是非、お越しいただきたいと思っております。宣伝はこれくらいにさせていただきます、本日は水戸徳川家のことについてお話しさせていただきます。

我が水戸徳川家は1609年に家康公の第11子である末っ子頼房公を藩祖に、間もなく400年になろうとしております。二代目をご存知水戸黄門光圀公です。諸国漫遊は作り事ですが、北は日光、勿来、南は木更津、鎌倉まで隠居期間中に、ドラマのあの姿で歩いていたようです。その間には將軍綱吉公や、領内で不正をはたらいた役人など多くを正しましたし、自らが始めた大日本史編纂のための資料集に助さん格さんを全国に派遣し、協力していただいた方々には光圀公が礼状を出したこともあり、公の善政の噂が広まって大阪の講談で水戸黄門漫遊記が作られたと言われております。

話は変わりますが、来年の大河ドラマは篤姫です。彼女の人生は、まさに波乱万丈でした。薩摩藩

分家の娘から、第13代將軍家定の御台所となり、さらには將軍の代わりとなって、倒幕軍に江戸城を明け渡しました。水戸藩では9代藩主斉昭公の時代に当たります。斉昭公は光圀公が亡くなった100年後にあたる寛政12年(1800年)に生まれました。今般の大河では、「葵三代」と違って悪役での登板です。その当時外国では、アメリカの首都がワシントンに決まり、エジプト遠征を行ったナポレオンが皇帝になった時代です。この時代は激動の時代であり、ロシア、イギリス、フランス、アメリカなどの諸外国が日本を含むアジアに接近し、斉昭公20才の年にはイギリスがシンガポールを領有するに至ります。幕府がアメリカ、ロシアとの通商を拒み続けていた時期で、一つ間違えれば日本も植民地化されるという危機に直面し、内政では幕府の財政が悪化の一途を辿った時代でありました。

まず、斉昭公は人心を西洋に向けるべく、自らも兵学、医学、天文学などを中心に優れたものは積極的に取り入れようとしていました。斉昭公の子供たちの部屋にあった火鉢には、星座の彫り物が施されていたほどです。当時先進の科学技術である望遠鏡や距離計、大砲、モールス信号機から日常生活の雑事に至るまで関心を寄せ、施策に反映させた政治家であったと言えます。博物館に収蔵されている望遠鏡も、斉昭公、慶喜公親子が一緒に覗いていたかも知れません。

江戸時代は鎖国によって西洋との交渉が絶たれたように言われますが、長崎を中心に多くの諸外国の情報が入っていました。斉昭公もオランダ新聞に目を通し、朝は牛乳やヨーグルトを食していたようです。斉昭公はそうした情報から西洋の大砲造りを決断します。大砲も反射炉も当時の職人たちには見たことのないものでしたが、斉昭公は職人たちを呼び寄せ、まず一緒に模型を作ることでイメージを与えました。イメージで立派な結果を出せる職人芸こそ当時の日本の民度の高さと言えましょう。

斉昭公26歳の時には水戸藩士会澤正志齊の「新論」が完成、斉昭公の兄である水戸藩8代藩主斉脩公に提出されますが、当時の世界情勢を踏まえ、外国勢による侵略の危機を訴え、天皇を頂点とする国体を重んずる論調が過激であるとの理由で出版が差し止められたと言います。しかし、門人、有志が全国に流布させ、全国諸藩に大きな影響を与えました。この本の礎には2代藩主光圀公の残した「我が君主は天子なり、今宗室は將軍家なり」の家伝がありました。この家伝は、光圀公が編纂を始めた大日本史の事業と

ともに、歴代藩主、斉昭公にも伝えられました。

斉昭公は1841年に藩校弘道館を創立しています。日本三名園に借楽園がありますが、借楽園は弘道館とセットで計画され、弘道館の開校は借楽園開園に合わされたといえます。「学問に励めば梅は花を咲かせる」という光圀公の言葉が斉昭公に伝わって、弘道館での学問に励み、咲いた梅を愛でて疲れを癒す施設として重要視されたのです。梅の実という兵糧のためでもあり、また領民に開放された日本最古の都市公園でもありました。

天保8年（1837年）に生まれた慶喜公も数えの5才から弘道館で父斉昭公に学んでいます。その弘道館の医学部で開発した新薬は、領内に光圀公の時代に設けられた薬局を通じて配給されました。天然痘の予防に当たり、斉昭公はまず藩医に命じて自分の子供たちに試してから、一般士民にも施しています。そうした意味では、種痘を受けた最初の将軍と言えましょう。

1860年8月斉昭公は61才の生涯を閉じますが、父に代わって新しい時代の幕を開けたのが慶喜公でした。慶喜公は11才で一橋徳川に養子に出された後も、父斉昭公から光圀公以来の尊王の思想を教え込まれますが、大政奉還の芽は慶喜公の血にもあったと思います。斉昭公の夫人は有栖川宮織仁親王女吉子といい、天保元年（1830年）に嫁がれ、斉昭公と吉子夫人の間に生まれた七男慶喜公が皇室の血が流れる最初で最後の将軍となりました。

14代将軍家茂公の急死により慶應2年（1866年）12月29才で将軍宣下を受け翌3年10月の大政奉還まで僅

か10ヶ月の短い在位中に、260年もの長い江戸時代に幕を引き、新しい時代に身を投じました。当時、イギリスは薩摩と、フランスは幕府と接近し着々と地盤を固めていましたが、諸藩を割っての代理戦争をさげ国体の維持を決断します。260年の幕藩体制に終止符を打った慶喜公の決断には察しきれない苦悩があったと思いますが、フランス革命とは対照的な世界に冠たる無血革命で我が国の独立を保ったのだと考えています。

慶喜公は明治に入り多くの子宝に恵まれ、そのうちの十一女を水戸徳川家13代当主に嫁がせ、明治45年生まれた14代当主となる跡継ぎを命名します。名は水戸学の礎であり慶喜公の思想の源である光圀公の「圀」の字、そして光圀公の思いを自分に教えてくれた父斉昭公の「齊」の字をとって「圀齊」と命名しました。それが私の父ですので、慶喜公は「ひいじいさん」です。そうお考えいただければ江戸はそんなに昔ではありません。天保8年（1837年）に水戸家に生まれ、11才で一橋に養子に出て、最後の将軍として大政奉還を成し、明治を生きた慶喜公は、幾多の波乱を乗り越えやっと心の里帰りを果たし、公の幕末は本当の終わりを告げたのだと思います。

徳川260年の歴史でいえば、明治以降今までで約半分、江戸に直すと享保時代です。今後この国が第二の幕末を迎えることなく、いつまでも平和で豊かなものにするために、現代の礎である江戸の時代を、そこに生きた人々のことを振り返っていただければ幸いと存じます。